



Bブロックにエントリーされた全12作品を公開します。

覇者となったのは果たして誰??

<http://www.columnland.net/> **にてごらんください。**

「あの時の握手」

監督が握手してくれたのは、あの時と、大学合格を報告した時の二回。中でもあの時の握手は、とても暖かった。

高校時代は陸上部で長距離をやっていた。全然大した選手じゃなかったが、毎朝毎晩走っていた。陸上が楽しかったから。

高三の十一月、長距離選手にとって最大の大会である高校駅伝の県大会が迫っていた。県を勝ち抜いて関東に駒を進めないと僕達三年はここで引退だ。ウチの高校は県内では上位の常連。そしてウチの監督は過去に何回も県を制して全国進出したこともある、県では有名な指導者だ。僕は三年の中では一番遅く、部内では九、十番手。選手枠は七つ。僕のライバル達は一、二年生。どうしても選手になりたかった。三年間この日のために走ってきたから。

大会前日のタイムトライアル、最後に猛追してくる後輩達を必死で振り切り、七位。死ぬほど嬉しかった。無事、三年生は全員選手になれた。

大会当日、レース直前に円陣組んで気合を入れた。その後、七人の選手に監督が一人一人握手を交わし、一言激励する。最後に僕とがっしり握手した監督は、

「お前が選手になれて、本当に良かった」

たすきが廻ってきた。最後苦しくて辛かったけど、県内きつての名将の手から僕の手に伝わった温もりは、どんなにキツくてもずっとそこにあった。

僕達は本当に後一步のところ関東に進めず涙を呑んだ。今思い出しても悔しいよ。でもあの日は一生の思い出なんだ。共に走った六人の戦友、影で支えてくれた仲間、そして監督。ありがとう。

「愛しい手」

彼女の『手』は忙しく、絶え間なく動いている。それは顔作り。毎日、日に何度となく手入れに余念がない。

以前はスラリとしなやかな身体だったのに、今やその気配すらなく太ってしまつた体重を『手』だけはそのままスマートなスラリとした細い手で支える。彼女はヒモや動く物、光る物にとっても興味を持っている。それらをいじくるのも大好きな彼女は、良く動く『手』で上手に遊ぶ。

時に庭から虫が室内に入ることがあるが、そんな時、気弱で臆病な彼女は、へつぴり腰で後込みしつつ器用に『手』を使つて追い払おうとする。その様子は可笑しく微笑ましい。

その手の甲はかすかにしめつていて、柔らかくひやりとした感触でさわりたくなる。しかし、その優しい『手』も私を鋭く引つ搔く。その爪の痛いことこの上ない、とは言つてもそんなことは気にせず私は彼女と遊ぶのである。

やがて遊びに彼女が疲れると私のベッドでスヤスヤと眠る。時折、かすかな音に耳だけが反応する。そんな時どんなに私が呼んでも返事は耳だけ。まるで「邪魔しないでよお！」

とでも言うかのように、チラリと目を開けてすぐに閉じてしまう。

そんな私の愛しい彼女は茶トラのミックス。
子猫の時わが家に来て早六年月日がたった。
もはや居なくてはならない家族である。

「親父」

病院に駆け込むと、もう親父とお袋がいた。

「あいつは？赤ちゃんは？」

「まだよ。もう少し。」

お袋がそう答えた瞬間、分娩室に産声がこだました。

「お疲れ様。目元が君にそっくりだ。」

「ありがと……。ねえ、見て。このちっちゃい手。こんなに小さくてもつかんだら離さないの。」

妻の指をキュツとつかんだ赤ちゃんの手は本当に小さく、でもちゃんと指が五本あり人間の手をしていて、当たり前なことだが僕はすごく感動していた。

部屋に親父がやってきて握手する。

「お前もついに父親だな。がんばれよ。」

親父の手は厚い皮に深いしわが刻み込まれていて、そして柔らかかった。これが、親父の手だ。

親父の手がでかいと思ったのは初めてキャッチボールを教えてもらった時だった。指が太く同じ人間の手とは思えなくて、親父の手は特別なんだと思い込んでいた。

「俺が父親かあ。」

口に出すと、実感が少しずつ湧いてくる。親父のようになれるか不安だけれど、この手であいつらを守ってやるんだ、守らなければいけないんだ、と言い聞かす。

病院の帰り、スポーツショップに寄ってグローブとボールを買った。久しぶりのグローブの感触はやけに心地よかった。

あいつには気が早すぎると笑われるだろうなと思い、一人笑った。

レポート提出日の心情

AM2:45

眠い中必死に体育のレポートの仕上げ。栄養ドリンクの空き瓶はもうゴミ箱の中。レポート用紙（しかもA4で）十枚分?! やってらんない。読むほうもきつと大変だろうに。でもやんなきゃ通知表赤点つけるとか言われたし。はああ... やらなきゃじゃん...。あーねむ... あー... あ... ..

やべーもう朝じゃんつ。提出日じゃんつ。

でも、あとはホッチキスでとめて表紙適当に書くだけだし。何とかセーフ。まあ目は腫れてるけど、今日は何だか自転車のペダルも軽い。いーねー、こんな瞬間に青春謳歌しちゃってる自分。

「なあ、お前体育のレポやったあ?」

「やったよー。もう手とか腱鞘炎になる寸前って感じ。」

「はっ? もしや手書き?!」

「もち。」

「相変わらず変なとこまじめだなあー。こんなん、ネットのコピーとか使っちゃえば一発じゃん。」

「.....!」

その手があったかああー!

……どんつ。

沖縄でまた一人の少年兵が、つちけむりになって死んだ。

どんなに沢山の手榴弾を持って突っ込んでも、相手にたどり着く前に撃ち殺される。どんなに上官が喚こうと、敗北は目に見えている。どのみち、ここを無事にのりきる術はありそうもないようだ。

防空壕の奥には、日本兵に焼き殺された女や老人の死体が山を作っている。兵隊さんのために場所をあける、という名目で。

「次はお前が行け」

上官の声が響く。隣にいる少年がビクと震える。彼は何も答えない。ただ手を震わせ、荒い息を吐き出している。

彼は小さい頃からの僕の親友で、よく野球をして遊ぶ。彼が投手で、僕は捕手だ。

……不気味な静寂が十三人の少年兵を包んでいる。

僕は彼を横目で見ている。すると上官が僕に向かって目で合図する。ぼくはすかさず彼に掴みかかり、怒鳴る。「何をしている。死を恐れるのは非国民のすることだぞ。お国のために喜んで死ねっ」……言わなければ僕も殺されていた。何もできない自分が悔しくて、体が熱くなる。

彼は僕をじつと見つめる。お互いの思っているこ

とは、言葉など無くても手に取るように分かる。こらえきれずに、涙が頬を伝う。

……助けてやれなくて、ゴメンよ……

僕は彼の懷から、いつか前もって書かされていた遺書を抜き取る。当然その内容は「指導」済みのものだ。そして僕は足元に並べてある手榴弾から四つほど拾い、彼の胸に押し付ける。彼と目を合わせられない。胸が苦しい。涙が止まらない。ここから逃げたい。大声で泣き叫びたい。

彼は僕の腕を離さない。片腕で手榴弾を抱えたまま、小さな喘ぎ声をシンとした壕の中に漂わせる。

……もう、死ぬしかないのか……

……俺って、親不孝なヤツだったな……

……もつと……野球したかったなあ……

僕は彼を壕の外へ連れてゆく。二人は何も言わず、これから彼を破壊する鉄の物体を見つめている。

彼は僕の腕からゆっくりと手を離し、そつと僕の顔を撫でる。マメだらけの彼の手は、暖かい。

外を一度見直し、深呼吸をした彼は、もう一度僕を見る。

「またな」って、二人は同時に言い、同時に頷く。そして、彼は、右に見える丘のほうへかけていく……

機関銃の乾いた音と、ちいさな悲鳴。

一瞬の後、爆音が大地を揺らす。

手のひらに降る雪

ゆきがウチに来たのはとても寒い日だった。

「公園のベンチに置かれてあったの。」

小学校から帰ってきた弟の腕には小さなダンボールが抱かれていた。

「凍えているの。何か食べさせてあげて。」

雪で真つ白になったニット帽をかぶっていた弟の頬は赤く、玄関の中でも息は白くなる。

一番寒いこの時期に公園に捨てられていたのだ。毛布にくるまれていたとはいえ、ゆきが生きて弟に拾われたのは奇跡に等しかった。

母はもちろん反対した。ヨケイナコトをした弟をひどくしかった。

OKを出してくれたのは父の方だ。責任感を養うために生き物を飼うことは悪くないということだった。

ゆきをよく食べ、日に日に元気になった。僕らはよくゆきの世話をし、ゆきもよく僕らになつた。

春は桜並木と一緒に走り、夏は海で遊び、秋には三人そろって昼寝をした。

しかし、ゆきはいつものどこか遠くを見ていた。

いつか来る誰かを待っているかのように。

今思えば、元の飼い主をずっと待っていたのかもしれない。

冬になったある日、突然ゆきがいなくなった。

僕と弟は必死にゆきを探した。一年間の思い出が次々と泉のように湧き出てくる。

弟は泣き出しそうだった。

「あの公園、ゆきが捨てられていた公園……」

僕らは走った。なぜか、ゆきがそこにいるような、でも早くしないと誰かに連れて行かれてしまうような、そんな思いが僕らを焦らせた。

……いなかった。

弟は泣いた。ゆきが捨てられていたベンチにもたれかかる。

僕の目にも涙があふれ、視界が歪みだす。

その時まで雪が降っていることを忘れていた。

僕は何かを取り戻すように手を空に大きく伸ばした。一生懸命、伸ばした。

雪はふわふわとふり、手のあたたかさにふれ、じわりと溶けて消えた。

手は語る

手はその人を語ると思う。簡単な例を挙げてみると、例えば工事現場のおじさんの手は厚くて、指が太かったりする。母親の手は洗物のせいでカサカサだけど暖かかったりするし、病氣にかかっている人の手はどこかやつれていて、元氣がない。それはその人のイメージからくる固定観念の一種だと考える人がいるかもしれないが、私は普段の私たちの生活と手の関わり方を見ると、どうもそれだけではないように思う。と言うのも、私たちは普段考え、そして行動を選択するが、それを実行するのは「手」と言う媒体を介して行われるからである。いや今はデジタル化が進み、そんなことはないと言うかもしれない、しかし結局デジタル機器に信号を送る作業は「手」によるものである。そして私たちの行動の記録は「手」に、例えばペンだこやアザとして蓄積されていったり、またそのような具体的な形として表れなくても、白い、傷のない、細い、など個々特有の雰囲気や「手」は帯びるようになるのである。握手をすると言うのは、まさにこの「手」の特徴を上手く利用している。よく昔は初対面の人同士握手を交わすと言う光景が目立ったが、これは「手」が名刺なんかよりも、その人がどんな人間かを伝える手段として優れていたからだと思う。

現在は化粧や整形手術などが発達して、もはや顔や表情などを手がかりに、その人を知るのとは難しくなっている。また、事実表面に現れる人格と本当の人格が異なるということも少なくはない。そんな現在でも素の私たちが現れてくるのは、やはりこの「手」と言う不思議な部分なのである。またその一方で「手」はそうした素の私たちを発信する装置であると同時に、受信機でもある。まさに「手」は顔以上にその人を語るのである。

手相売ります

「皆様、しばしお手を止め、此方に耳をお傾け下さい。

今からほんの少しお時間を頂きまして、商品の宣伝をさせていただきたいと思ひます。そんな物に興味はない？まあそうおっしゃらず、騙されたと思つてお聞き下さい。なにせこの商品を取り扱っているのは当社だけ、という非常に稀少な品ですから。

私共が売っているのは、手相でございます。

皆様も、一度は手相を見てやれ生命線が細いだの結婚線が長いだの、言ったり言われたりした事があるかと思ひます。そこに現れた運勢を信じる信じないは個人の自由でございますが、私共は、手相を、皆様のお気に召すような物に取り替える事が出来るのでございます。

例えばこの、生命線の短く、しかも二股に分かれている手相の持ち主。この方は、手相を生命線の手首の付け根まで届くしつかりとした物に買い替えた結果、九十二までいたつて健康に過ごされ、大往生されました。余命一年と宣告された方が手相を替える事により十年生きた例などもございますし、生命線をより長い物に替えた方は、元々同じ程度の長さの人より最低80%（当社比）は長生きしておられます。他にも金線、結婚線、健康線などを替えた方にも、

金線を取り替えた方がその替えた当日に買った宝くじで見事当選を果たしたりと、十分な効果が発揮されております。更に運勢をより良い物にするだけではなく、金線と健康線が一つになつてしまつてゐる、運命線が手の平に見当たらない、などの悩みも私共は解決する事が出来ます。

手相の取り替え方などについては企業秘密の為、この場で詳しくお話する事は出来ませんが、その他のご質問や手相購入のご相談・お見積もりなどは後程私の所までおこし下さるか、フリーダイヤル0120の——お待ち下さい、ご質問などは後程お伺い——

——結婚運の良くなる手相に替えたのに、一向に結婚出来ない、と？残念ながらお客様。お客様のご購入された手相の結婚線は、二十歳前後で結婚出来る、という物でございます。見たところお客様の年齢は、三十を幾つか越えておられるかと……。さすがに当社の手相といえども、十年ばかり時を巻き戻して運勢を変える事は出来ません。」

風の便箋

春の満月を迎える日、街中が柔らかな風に包まれる。私達はいつの頃からかその日を『風の日』と呼ぶようになった。そして、名前も知らない誰かに向けて、手紙を風に流す『風の便箋』という習慣も始まった。

—三月・風の日

毎年、風の日には遥か彼方に思いをよせて手紙を風に流していた。でも、今年はそんな気持ちにはなれずに一人で落ち込んでいた。君が一人どこかへ引越してしまつて、しかも、簡単に会いに行けるような距離でもない。

その夜の天気は雨で満月は隠れてしまつていた。

—四月・風の日

君と別れて約一か月が過ぎていた。悲しみは癒えつつもまだ残っている。気持ちを吹っ切るように窓を思いっきり開く。ベランダに並べられたプランターの影で何かがパタパタと踊っているのが目に入ってきた。何気なく拾ってみると、それは風の便箋だった。

いつか、あなたと出会えたら

誰からの手紙なのか分からないはずなのに、どうしてかそれが君からのメッセージのように思えた。そして、私は今日が風の日だということを思い出す。君に向けて手紙を書いてみようと思った。

もう一度、会いたい

それは届くはずのない、たった一人に向けた手紙だった。風の便箋ではないけど、気がつけば一通の手紙を風に流していた。

—五月・風の日

いつの間にか、今年最後の風の日になっていた。今年も一度くらいは風の便箋を流そうと思ひ、ペンを握る。

あなたに幸せが訪れますように

自分がほしいと思う言葉を書いてみる。ベランダへと出て、そっと手を放した。手紙は風に誘われて空へと舞い上がる。

不思議な満足感に包まれて部屋に戻ろうとすると、ふいにふわっと少し強い風が吹いた。驚いて目を閉じてしまう。再び目を開けると、部屋にやつてきた一通の手紙が目についた。どんな所を通ってきたのだろうというほどくたびれているそれを拾い上げる。宛名を見て、驚いた。そこには私の名前が書かれている。急いで広げた。

この手紙が無事に届いたなら、きつとまた会えると信じて送ります

そして、最後の行にはもう見ることはないかもしれないと思つていた君の名前があった。

—七月・星祭の夜

満月の夜空の下、竹の葉が風に吹かれ、音色を奏でている。私はまだこの街にいた。そして、この風の向こう側には確かに君がいる。星空を見上げて思う。私達は風の日に、彼らみたいに再会するのかな。風の日に思いを乗せて、私はある計画を進めていた。

—次の年の風の日

そこから遠く離れた街で、柔らかな日差しに包まれて一通の手紙が空を舞った。
会いに来たよ

「ふざけるな。お前は何度言ったらわかるんだ」

また親父に叱られた。これで三回目の万引き。僕の仲間とともに警察に連れて行かれた。盗みたくなかった。ただ仲間から見捨てられるのが嫌だっただけだ。

僕は孤独に育った。父は僕の幼いころから仕事が忙しく家に帰ってくるのが週に一、二回だった。帰ってきててもすぐ寝てしまう。母は僕が四才の時に父と喧嘩して家を出て行った。僕を置いて。僕は一人だった。僕は自然と家に帰らなくなった。そして、仲間と悪さをするようになり……。心のどこかではやってはいけなさと叫んでいるが、無視していた。無視するしかなかった。

父と一緒に警察を出た。暗い道を二人で歩いていた。靴ひもがまたほどけた。しょっちゅうのことだ。いつものように縛り、立ち上がると

「バシッ」

父の少し温かい手が飛んできた。父はただ泣いている。父の涙が僕の靴に落ちた。父は僕を抱きしめた。

「お前を一人にして悪かったな」

家に帰ると、僕はすぐ蒲団をかぶった。遠くの方から父の声が聞こえた。学校の先生に謝罪の電話をしているようだった。結局、その日は父に謝れなかった。

その夜、ふと目を覚ますと、僕は「18」という服を着て、一本の道の上に立っていた。今、僕が立っている道以外に数え切れないほどの一本道が並んでいた。

「ここはどこだろう」

隣の道では、多くの見知らぬ人がバトンを受け取り

走り始めた。また僕は取り残されていた……

しばらくして、僕の前を走るランナーが遠くに見える。徐々に近づいてきた。バトンをしつかりにつぎつて。

「ダッダッダッダッダ」

僕はいつもの要領で靴ひもを結び、振り返ると、そこに立っていたのは、僕、自分自身だった。僕には汗だくの彼は疲れているようにしか見えなかったが、その顔には笑顔があった。彼は僕の横に立ち、僕のほうを向きながら

「あー、疲れた。走るのって疲れるな」

彼は僕にバトンを渡した。そして、手と手を取り合いい、しっかりと握手をした。その手はほんのり暖かかった。彼はうつすら涙を浮かべながら、

「次はお前の番だ。どんなことがあっても走り切れ。まだやりなおせるんだから。ただこれだけは忘れちゃダメだ。お前は一人じゃないってこと……」

彼の涙が僕の靴に落ちてきた。ほんのり冷たさを感じた。その時、僕は初めて今までの自分を悔いた。多くの人に迷惑をかけてきたことを。

「やり直そう。自分のためにも、みんなのためにも」

番号「17」をつけた自分に別れを告げ、僕は一目散に走り出した。

番号「19」をつけた僕の待つ場所をめざして

そして、二度と僕のひもは緩むことはなかった……

「あの日を境に」

変心

遂にやってしまった。あの時の記憶が鮮明に脳裏に蘇る。

目の前にある肉片はさっきまでは確かに動いていた。しかし今はどうだ。そんなことなど感じさせないくらいに完全に「モノ」を装っている。生きていたなんて嘘だったんじゃないか。だがそんな考えもまだ体に残った熱により払拭された。突然のギャップに多少の動揺を感じながらも冷静に現状を把握している自分がいた。自分が自分でなくなっていくような感覚だった。

あれを境にして世界が変わった。違和感を覚える。これにも序々に慣れていくのだろうか。そう考えている間にも自分が変わっていくような気がして恐怖している。

この世界に入ったからにはいつか経験するのだとは解っていた。覚悟はしていたはずだ。ただ最初の一人を経験したというだけにすぎず、これから何度も繰り返すことなのだ。悩んでどうする。自問自答を繰り返しても考えは堂々巡りするだけで前に進まない。変わっていく感覚と取り残された心。二者に挟まれ身動きが取れなくなると黙って目をつぶった。

生死に対する当たり前の感覚を失っていくのが怖い。科学的に見れば、ただ物質が生命活動を静止したというだけじゃないか。ムシだって平気な顔をして殺してきた。それがヒトになっただけだろう。そう考えて自分を納得させようとする。だがそんな行為も自覚していればただ空しいだけだ。意識を集中すると自分の心臓の鼓動がわかる。ドクッ、ドクッと鈍い音を立てその寿命を削っていく。冴えない音だが生きている感触を得て安堵している。

「先生、次の患者さんが入ります。」

その言葉を聞くとふと我に返り、手を見つめた。赤く染まっていくような気がした。

—冷凍庫から、氷をつまんで出そうとすると、氷は指にくっついてしまう—

手の温かい人は心が冷たいなんて、嘘だ

君は、すべての人を肯定的に見られる人

どんな時も前向きで、心に春の太陽を住まわせている人

僕は、自分を守るのに必死で

傷を少なくするために、常に最悪の場合を考えていた

誰かの言葉に傷つけられないために、心にトゲを飼っていた

霜をまとった、氷みたいに

君の手は、僕にはあたたかすぎた

君と手をつなぐと、心がギュッと苦しくなった

—氷を指からはがそうとすると、今度はその手にくっついて

気がつく、指先がとても冷たくなる—

もう、終わりにしよう。

望みとは正反対の提案

このままじゃ、君の心まで冷やしてしまいそうで、こわかった

あなたは、ほんとうはやさしい人

誰よりも傷つく痛さを知っているから

誰かを傷つける前に心を霜でとざしてしまう

それでも、そんな不器用なあなたの手は

私の心には、十分にあたたかい

私の心には、あなたのあたたかさがこちいいんだよ

終わりになんて、したくないよ

もうすぐ。きつともうすぐ、霜がとけて

中からあらわれるのは、冷たい氷なんかじゃない

氷に似て、すぎとおって輝いているけれど

あたたかいあなたの心

ice and hands

コンテスト結果				
[Aの部]				
コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
A01	手　ー未来ー	18 pt	2 位	0 sp
		母は、父は、医者は、教師は……連想のおもむくままにパッパッといろんな手を大書きにしていって、ラスト自問でさくり。軽い読みごちで、狙い通りの表紙エントリー、かつ緑の筒のサワークリームゲット、おめでとう。 ただ、ちょっと平凡な印象で読み流されてしまう感あり。ひとことだけでも個性的なフレーズがあると、もっと映えたのでは。 イチオシフレーズ：「僕の手はナンノタメニ」		
A02	不格好	0 pt	10 位	0 sp
		弱い自分を少しずつ変えてゆこうとする、ひたむきな気持ちが一人称トークでせつせつと。 ひょっとしたら、この無骨な手は心の中の幻なのかもしれない。でもそれに支えられているんだという、春のような全面的な信頼感が、あたたかく伝わってきます。		
A03	最高の冬	3 pt	8 位	2 sp
		寒さのなかだから、より心に残るぬくもり。ていねいに描写されたラブコメ調の風景に浸れたのですが、後半、さっさと次を探しちゃうあたりの展開が急すぎて感興をふくらませきれなかった感。 「冬の寒さとともに生きてきた」あの日の思い出に浸るところで終わっても良かったのでは。 特別賞：作者の顔が見てみたい賞/上京で賞 イチオシフレーズ：「冬の寒さとともに生きてきました。」		
A04	俺の手が悪いのか	3 pt	8 位	5 sp
		あ～あ。ちょっとした不運がコミカルにリズムよく描き出されて楽しめます。 順位はあまり上がらなかったけれど、特別賞を5つも受賞!! それだけ話題になったのは価値あることかなと思います、おめでとう。 特別賞：班内で盛り上がったで賞/それでも僕はやってない賞/あなたの手がきっと悪いで賞/リアリティー賞/大慌て賞 イチオシフレーズ：「俺は手をそんな目的では使用しておりません!」「ち、ちょっと」「あなたも好みじゃないし」		
A05	報讐と怨恨～偽古文調で～	0 pt	10 位	1 sp
		叙事詩ですね。ニセの英雄を倒してみたところで、この世は乱れるばかり。格調高く伝わってきますが、敢えて擬古文にした効果が発揮しきれていないような。「家族の助けを求める声」のようなフツの文体が混在しているので、全体としてムリしたような印象になってしまった感。ムリ＝チャレンジングな精神はおおいに推奨なのですけど。 特別賞：よくまとめたで賞		
A06	優しい手	4 pt	6 位	0 sp
		臨死体験って、なぜにお花畑なのでしょう？　は措いって。これは臨死ではなく、そのままさくっと彼岸に渡ってしまったもようです。彼岸で生き直し、というストーリーは爽やかなのですが、でも、彼岸でもせっせと働かなくてはいけないのが、ちょっと息苦しい。どうせなら鍛冶屋さんじゃなくて、もっと彼岸らしい夢のあるお仕事だと、より感情移入できたのでは。		
A07	彼の戦い	29 pt	1 位	1 sp

		「尻尾」で犬だな、と察知。荒ぶる野性本能がけなげに伝わってきて爆笑でした。特に「俺の体は動いてしまった。前足が差し出される。」がツボ。そう、「お手」じゃないんだ、前足なんだっつ、と。 臨場感ゆたかな描写で、「次の戦い」へ向けて負けるなっ、と読者の気持ちを味方に付けての首位、おめでとうございます。 特別賞：犬で賞 イチオシフレーズ：「お手！」×2 「これじゃますます負け犬だ」
A08	おじいちゃんの手	4 pt6 位0 sp 実体験ベースでしょうか。つないだ手のぬくもりが永遠に喪われてしまうまで。 たんとと語ることで、かえってしみじみと迫ってくるものがあります。たとえば、どんなおもちゃを買ってもらったのか、とか一点だけでも具体的に点描すると、そこがより輝いたのでは。
A09	言葉はなくとも	0 pt10 位1 sp サッカーほど1ゴールの喜びが大きいスポーツもそうないですよ。その喜びの大きさをリアルタイムでいねいに伝えていただきました。 サッカーは足、でも喜びの表現は手、という対比をよりクリアに見せると、お題がより生きたように思います。 特別賞：スポコン賞
A10	つなぐこと、つたえられること	8 pt4 位0 sp 赤ちゃんの指しゃぶりがとても新鮮な視点で語られて、冒頭いきなり引き込まれます。ちょっとクサくなる後半も「あさ」がじょうずに救って純愛さわやかなラストへ。おしあわせに。
A11	Seize the Day	13 pt3 位2 sp うわ。とちょっと引き気味になりながら描写の迫力にたじろいでいると、かなり深い結論へ。 人の心の痛みにするどく踏み込むテーマだけに、途中で妙なミスリードは、かえって逆効果に思えたのですが、いかがでしょう。読者サービス?? 愛し合うことは、すなわち傷つけ合うこと、その深刻さを減速させずに、そのままストレートにぶつけていただくのもありかな、と思った次第です。 冥王星からリストカッターへ、変幻自在の作者さんの今後に期待。 特別賞：A4賞/まぬけ?賞 イチオシフレーズ：「死にたくないよお」×3 「今度切るときは、俺にやらせてくれ」「私はリストカッター」でイチオシフレーズ大賞も受賞です。
A12	ある一族についての考察	8 pt4 位3 sp よく思いつくなあプリングルス。爆笑ネタをもっともらしい口調で、という語り口のはまりっぷりがたまりません。お茶会ネタにおいしくいただきました。 特別賞：独自の視点が良いで賞/コンソメスープがなかったで賞/シーソルト&ペッパー賞 イチオシフレーズ：「ジャパナッツタカタ」×2

[Bの部]

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
B01	あの時の握手	12 pt4 位0 sp はじまりは、熱くスポーツドラマ。 ハッピーエンドに終わっていないところが、逆に真実味を感じました。走りの光景を少し点描していただくと、より入り込めた気がします、スポーツはいいなあとしみじみ。これが大学合格のほうじゃ、やっぱり絵にならないですよ。 イチオシフレーズ：「お前が選手になれて、本当に良かった」		
B02	愛しい手	0 pt10 位0 sp 手の動き、耳のピクン、観察力のゆたかさを感じます。 ただ、すぐに猫だなとわかるので、さいごまで伏せておく必要はなかったのでは。身を以てネタを提供してくれたミックス君によろしく。		

B03	親父	5 pt	6 位	1 sp
		親父の手、赤ちゃんの手、そしてグローブ。三つの具体的なモノをうまくつないで未来志向のストーリーにしたワザが光ります。ぽっぽっとイメージだけを大写しにして、語りすぎない手法も効いてますね。コンパクトに見せるワザ。まるで30秒CMのような(←絶賛)。 特別賞：あったかいで賞 イチオシフレーズ：「目元が君にそっくりだ」		
B04	レポート提出日の心情	0 pt	10 位	2 sp
		日常光景をコミカルに。「手」の解釈がユニークでした。 ちょっとオチが弱いかな。レポートの内容を少し盛り込むと親近感が湧きそうですが。0ポイントだったけれど、「その手があったかあー！」がメガヒットでイチオシフレーズ大賞ゲットです、おめでとう。 特別賞：ウケねらい賞/その手があったで賞/このテーマに「その手があったかあー！」賞 イチオシフレーズ：「その手があったかあー！」×9		
B05	丘	25 pt	1 位	0 sp
		重たい擬音とともに重たい光景がまわりはじめます。 沖縄戦。現在形で語ったところが、描写のこまやかさとあいまって映画のような臨場感でした。徹底して「僕」の視点、というブレのなさも読者の心につよい印象を残します。納得の首位といったところでしょうか。おめでとう。 イチオシフレーズ：「次はお前が行け」「土煙になって死んだ」		
B06	手のひらに降る雪	3 pt	7 位	0 sp
		まっしろなふわふわ。仔犬でしょうか。「ゆき」という名前ははまりすぎの気もするけれど、雪の儚さときれいにシンクロして、失われたもののせつなさがしんしんと降り積みます。		
B07	手は語る	6 pt	5 位	3 sp
		発信機であり受信機でもある。そんな手についての思いのたけは伝わってくるのですが論証として組み立てきれなかった感。 〇〇だから●●、よって××、と証明のようにまず論旨を整理してから枝葉をつけるとよいのでは。でも、固いものへのチャレンジが評価されて「教科書にのっていてもよい」教科賞などいただけました。 特別賞：教科賞/おつかれさまでした賞/改行しま賞 イチオシフレーズ：「手は語る」		
B08	手相売ります	15 pt	3 位	0 sp
		妙なものの売り込みが、「ございます」調で、まじめくさって語られて、おかしみを醸し出します。最後に一波乱という組み立ても楽しい。年齢まちがいのこいつは通信販売でしょうか？ 特別賞：タモリ賞		
B09	風の便箋	0 pt	10 位	3 sp
		TA陣に衝撃走る。なにゆえに、この作品がゼロポイントなのかっ！ 空を見上げる思いで読みました。うつくしい。風の便箋という風習に載せて奏でられるピュアな思いが、しあわせ色に染まります。ちょっと非日常、ちょっとメルヘン、そのさじ加減が絶妙でした。 特別賞：明日は明日の風が吹くで賞/独特で賞/オリジナリティ賞		
B10	ーあの日を境にー	1 pt	9 位	0 sp
		靴に落ちる涙。前へ前へと新しく生き直してゆこうという気持ち。寓話的光景としてくっきり見せて応援したくなる共感力大のメッセージトークでした。 イチオシフレーズ：「番号19をつけた僕の待つ場所を目指して」		
B11	変心	21 pt	2 位	0 sp
		ラストの赤く染まってゆく手がイメージを鮮烈に喚起。医者という仕事のすさまじさがずっしり伝わってきます。想像力で、ここまでリアルに描けるものなんですね。 ちょっと残念だったのは「先生、次の患者さんが……」というタネアカシ・セリフのぎこちなさ。ここがポイントなので、もっと自然体で。 特別賞：あとあとよく考えたらサイコーだった賞		
B12	ice and hands	2 pt	8 位	3 sp
		指にくっつく氷、というとても身近な体験から立ち上げて、叙情ゆたか。 春の太陽、そして霜。人の心が誰しも備えている二面性を対話形式でこだまさせたところが秀逸でした。 特別賞：構成にこったで賞/レイアウト賞/レイアウトが良かったで賞		